ロンサール詩集注
その1－1
「マリー・スチュアートへのエレジー」

江口　修

はじめに

筆者はアレゴリーの視点からロンサールのテクスト再読を試みているが,[1] 以前より集注の必要性を強く感じていた。表層と深層との関係といった観点からではもちろんない。単に再読がよって立つべき「テクストの現在」について見落としがありはしないかという恐れによるものである。注釈に関しては，ロンサールと同時代のミュレの『恋愛詩集』の注釈版を皮切りに，ローモニエ版『全集』をもって一応完結したかに思われる。しかしその後の研究の蓄積を見るならば，やはりテクストの現在をなんらかの形で標定する作業が行われてよいのではないだろうか。そこで筆者が着目したのは，比較的後期の詩篇についての集注であった。宗教戦争勃発後のほとんど詩とは無縁の宮廷世界にあって，詩王の名を欲しいままにしながらも，初期の潑溂とした詩興溢れる傑作群に迫ることも叶わぬ日々の作品は，絶頂期のテクストへの接近のもう一つの手掛りになるようにも思われたからである。簡単に言ってしまえば，マルセル・レイモンが編纂した『フランス詩とマニエリスム』に収められたロンサールの詩篇中1562年（ユグノー戦争の開始）以降のものについて集注を試みてみようとするもので，今回はその中から「マリー・スチュアートへのエレジー」を手始め

1）拙論「ロンサール,『讃歌集』および『讃歌集第二の書』について ── アレゴリーのマニエラ ──」（小樽商科大学「人文研究」第72輯）および「『恋愛詩集』再読 ── 詩論のアレゴリー」（同上，第76輯」を参照されたい。

に選んでみた。

テクスト[2)]

000 Elegie
001 Bien que le trait de votre belle face
002 Peinte en mon cœur par le temps ne s'eface
003 Et que tousjours je le porte imprimée
004 Comme un tableau vivement animée,
005 J'ai toutesfois pour la chose plus rare
006 (Dont mon estude & mes livres je pare)
007 Votre portrait qui fait honneur au lieu,
008 Comme un image au temple d'un grand Dieu.

000タイトルは，84年版の第六『総合作品集』ではA elle mesme（「同前」の

2）底本としては，ローモニエ版全集（*Œuvres complètes de Ronsard.* 《Société des textes Français Modernes》 Paris, Hachette, Droz, Didier, Nizet, 1914－1975, 20 t. en 25 vol. なお今回本詩篇全体に集注を試みるつもりであったが，筆者も参加しているロンサール研究会のコンコーダンス編纂部会が，現在『オード四部集』までのテクスト機械可読化作業をおこなっている。来年（1990年）にも完了が見込まれているので，それを待って，語彙の比較検討や構文上の特質の検討を踏まえ，改めて集注を試みたい。したがって今回は導入部までで留めておく。
なお参照した辞書および文法書は次の通りである。
Edmond HUGUET, *Dictionnaire de la langue française*, 7 vol., Didier, paris, 1925－1967.
Randle COTGRAVE, *A dictionarie of the French and English Tongues*, London, 1611（リプリント版）.
P.－E. LITTRÉ, *Dictionnaire de la langue française*, 4 vol et 1 supl., Hachette, Paris, 1877.
George GOUGENHEIM, *Grammaire de la langue française du 16e siècle*, Picard, Paris, 1974.
Ch. MARTY－LAVEAUX, *La Langue de la Pléiade*, Slatkine Reprints, Genève.

意)，87年版第七『総合作品集』ではFantaisis. A elle mesme（「気紛れ」の意か?）となっている（以上ローモニエ *O. C.* T. XIV, p. 152)。マルセル・レイモンが『マリー・スチュアートへのエレジー』としているのは，ローモニエの脚注（同上，p. 152)「このエレジーはスコットランドへ戻ったマリー・スチュアートに送られたもの……」に拠ったと考えられる。P. ノラック（NOLHAC）によるクラシック・ガルニエ叢書の『ロンサール詩選集』(1973年）では「フォンテーヌブローのマリー・スチュアート」と，選者によるタイトルが付けられている。

†マリー・スチュアート（Marie STUART）：エリザベスI世のイングランド王位を窺い暗殺の陰謀を企てたとして処刑されたスコットランド女王。色欲と権力欲の権化のように語られるが，チューダーの血を引き，イングランドの正統な王位継承権を持っていたわけで，むしろカトリックとプロテスタントとの宗教対立の犠牲者と見るべきである。幼くして，後のフランス国王フランソワII世フランソワ・ド・ヴァロワの許婚者としてフランスに渡り，ヴァロワ朝宮廷で育てられる。フランスルネサンスの絶頂期を体現する宮廷女性の一人。

ロンサールは「スコットランド女王御出立のエレジー」(*O. C.* T. XII. pp. 193－199.）で彼女の境涯を次のように描いているので，高田勇先生の訳[3]で紹介させていただく。

第一におまえ（＝「運命」）は，乳離れしない頃から
彼女に不幸を負わせた，
苦悩に苛まれた彼女の母親が
イギリス軍を恐れつつ，その懐に抱いて，

3）高田勇『ロンサール詩集』，青土社，東京，1985年，pp. 310－313.

スコットランドの地を駆け巡り彼女を匿まっていたとき。
揺籃から出るか出ないかのうちに
おまえは彼女を舟で海へ乗り出させた，
生地も，王杖も，両親も棄てて
フランスに住むために。

すると，おまえは意地悪な心を変えて
優しい眼で彼女を見つめ，
孤児(みなしご)で異国者(よそもの)だというのに
（ああ，おまえは何と移り気で軽薄だ）
彼女をわれらが王の子息に結び合わせ，
やがて，彼はフランスを支配するにいたった。

おお，おろかな「運命」よ，続いて彼女を
大いなる名誉の絶頂にまで押しあげておきながら，
彼女の夫を十六歳で殺した。

――中　　略――

苦悩に苛まれた美しい妻は
彼の死後は，忠実な伴侶(とも)をうしなって
森のなかで嘆き暮らす
やもめの雉鳩さながら。
絶えて別人を選ぼうとは望まない。

――中　　略――

ああ，「運命」よ，こんなに悲惨な死で
彼女を傷つければ十分ではなかったか。
彼女の国をかくも卑劣に

異説や分派や戦争で満たさなくとも，
分派でばらばらになる前に
武勇の誉高き民を嗾けなくとも。

――中　　略――

おお，「運命」よ，おまえはまだ倦き足りず，
残酷さでわれらの苦悩を増す，
空の星をも恥じ入らせるほどの
彼女の美しい眼をわれらから奪い取ろうとして。
あの神ながらの美をわれらから掠め盗って
海の浪に与えようとして。

海が陸になれば良い，
船が岩のように海辺に固定すれば良い，
われらの時代を慰めるこの徳を，
王をも民をも満足させる
この美，わが時代の誉を，
船がさらって行くのが怖いのだ。

――中　　略――

さあ，黒衣をまとったエレジーよ，
そそり立つ岩山の絶頂に登れ，
人里離れた森を探せ，
いとも辺鄙な場所へ逃げよ，
そして，川辺で嘆きつつ，
風に向かってこう語れ，
「近頃，ロンサールは失った
一人の女主人，高価な真珠，一輪の花，

良き心根の花，フランスを去って
サヴォワに住む神聖にして稀有のマルグリットを，
今また一人の女王を失う，
フランスとわが詩の誉であったのに」

この他マリー・スチュアートを歌った詩には同じ1561年の春から夏にかけて作られたものに，リュイリエ卿あてで，彼女の出発を嘆いた「リュイリエ卿へのエレジー」(*Elegie à L'Huillier, O. C.* T. XII. pp. 189－193) と「スコットランド女王へのエレジー」(*Elegie à la Royne d'Ecosse, O. C.* T. XII. pp. 277－284) とがありちょうど三幅対をなして，献呈詩の一頂点となっている。

ところで，マリー・スチュアートがスコットランドへ帰国することになった経緯については，どうやらカトリーヌ・ド・メディシスの意向が大きく作用しているようで，ミシェル・ダッソンヴィル (Michel DASSONVILLE) によれば，「この旅立ちは，追放であり，カトリーヌ・ド・メディシスが，ギーズ家の策略の切り札である人望厚い若き王妃を遠ざけようと望んだためであった。－中略－このことを知らない者は一人もいない筈だ。マリー・スチュアートの出発を嘆くこと自体宮廷人のすべきことではなかった。」(*Ronsard－Etude historique et littéraire－IV. Grandeurs et servitudes,* Droz, Genève, 1985, pp, 119－120) だとすればロンサールのマリー・スチュアートへの賛辞は危険を覚悟の上でのものということになり，その思い入れがかなりのものであったと判断される。もちろんロンサール以外にもマリー・スチュアートの事実上の追放を惜しんで詩を書いたのは，少なくともローモニエの「リィリエ卿へのエレジー」の注 (前掲) を読む限りでは，「カトリーヌ・ド・メディシスの切れ者の侍臣」リュリエその人が一人おり，ダッソンヴィルの指摘も今少し敷延して，マリースチュアートの魅力の圧倒的であったと考える方が良いかも知れない。

昨年，ル・ロシェ (Le Rocher) 社より，ジャン＝クロード・パスカルが大部 (総頁数991ページ) のマリー・スチュアート伝『呪われた女王 －マリー・

スチュアート ファイル－』*La Reine Maudite －Le dossier Marie Stuart－*を出したが，著者の思い入れを割り引きして考える必要があるとは思われるものの，現在までのマリー・スチュアートに関する資料を網羅した上での描写であり，また十六世紀の日常世界の考証も行き届き大いに参考になる。彼女がどんな女性であったかについて，パスカルの描写を引用しておこう（p. 15)。

幼少時には銀灰色がかった金髪であったが，年と共にその色合いを深くしていった。このことから彼女はチューダ家の赤褐色がかった金髪を（ジャック五世を介して）受け継いでいると判断される。その琥珀色の澄んだ視線は金色に輝き，その目の色は母親の淡褐色の眼と父親の青灰色の虹彩を合わせたものであった。

父親からは衆を圧倒する力強さと，相当に神秘的な魅力（magnétisme）を引き継いでいる。

――中　略――

ジャック五世からはその激しい性格も受け継ぎ，大いにはしゃいでいたかと思うと，一転して塞ぎの虫に取り憑かれるといった具合であった。楽観と悲観が交互するこの移り気な性格はスチュアート家から来たものであろう。

――中　略――

ギーズ家から受け継いだのは，なによりもまずその巨大な体軀で（その身長は 180 ㎝）そして一部ゲルマン的な性格である。また学問への興味と強い自尊心も。

――中　略――

彼女の魅力，繊細な精神，音楽の趣味，快活な話し振り，座興好き，これらは生来のもので自然に開花したものである。

この描写を信頼する限りでは，髪と目の色そして巨軀を除いて，ロンサールの理想とする女性であることには間違いない。カトリーヌ・ド・メディシスの命により作詩されたと思われるエリザベスＩ世に捧げられた「イギリス女王陛

下へのエレジー」(*O. C.* T. XIII. pp. 39－62) の大仰な公式的修辞の羅列ぶりと比較しても，いかにロンサールがマリー・スチュアートを慕わしく思っていたかが理解される。だが，彼女の最期は上に引用した「出立のエレジー」で呪った「運命」の無慈悲の極みでしかなかった。87 年の『総合作品集』で「気紛れ (Fantaisie)」をタイトルに加えたのもこの辺りのことを観じてのことかも知れない。

†エレジー　日本語では「悲歌」などとされ，ロンサールも上に引用した「出立のエレジー」の最終聯では「黒衣をまとったエレジーよ」といかにも近代のエレジーを思わせる表現をしているが，じつは十六世紀，正確に言えばボワロー以前ではこのような限定されたものではなかった。アンリ・シャマールによれば（『プレイヤッドの歴史』*Histoire de la Pléiade*, Didier, Paris, 1961, 4 vols）

ヘレニズムにどっぷりと浸かっていたロンサールのことであるから，五歩格と六歩格を組み合わせた独特の形式のギリシャのエレジーが……軍歌でもあり，……格言詩でもあったことを知らない筈はない。またミムレルモスが青春のはかなく過ぎ行くことをエレジーで歌ったことを知らないわけもないだろう。またアレクサンドリアの詩人達とそのローマの後継者達……がこの形式を好意の表出に好んで当てたことも知っていたに違いない。ロンサールがエレジーを用いるときに影響したのはこのアレクサンドリア～ローマの流れであろう。

さらに，フランスにエレジーを初めて導入したクレマン・マロも同じような捉え方をしていた。－中略－ヘレニストの影響と同時に，イタリアの詩人ルイジ・アラマンニ，その『トスカナ作品集』(リヨン，1532 年) にはフランス王に献じられた 24 の親愛の情を歌ったエレジーが含まれている。彼の影響もあったことも確認しておくべきだろうか。(p. 26)

プレイヤッド派と同時代の詩論家で，デュ・ベレーなどから激しく攻撃されたトマ・セビィエ（論調が穏健なだけで，その理論はプレイヤッド派とあまり変わらず，むしろより整然としている）が「したがって，エレジーは恋心を綴る書簡体詩に用いよ。そして常に十音綴で作詩するように。」（『詩法』*Art Poëtique*, T. II, ch. vii, Gaiffe, Paris, , pp. 156）と断じたのを受けて，デュ・ベレーは『フランス語の擁護と顕揚』で古代に倣ってむしろ神話的趣きを持ち込むべきだと主張したが，シャマールの言うように「なぜか十音綴で作詩して」（前掲書 p. 27）いて，セビィエに屈した格好になっている。

ロンサールがはじめてエレジーを用いたのは，1553年の『オード集第五の書』の第二版への追加詩篇であった。このうち「エレジー詩人，アントワーヌ・シャテニィエの死を悼むエレジー」*Elegie sur le trepas d'Antoine Chataignier, poëte elegiaque, O. C.*, T. V., p. 243）だけがチビュルリュスの死を歌ったオイヴィディウスのエレジーに倣って哀調を帯びている。音綴数も古代風を狙ってか十音綴と十二音綴を時折交錯させている。その後も書簡体詩であったり，また音綴数も一定せずロンサールのエレジーは性格を明確にしないまま推移する。

1563年，書名にそのまま「エレジー」が冠せられた『エレジー，仮面劇詩，牧人詩』が出版されるが，愛のエレジー，観念のエレジー，宮廷のエレジーの三つに分類されてはいるものの，やはり近代のエレジーからは程遠いままである。ただ注目しておくべきことは，宮廷詩人の地位をすでに確立していたロンサールは，この「宮廷のエレジー」において詩想の冴えを見せていることである。宮廷の貴顕の士達を活写して，神話的テーマを融合させる手際のよさは，初期のインスピレーションに満ちて詩興の赴くままに疾走するするかのようなロンサールとは違っているものの，深い憂欝を背後に秘めながら平明で直裁な語り口は，短かったフランス・ルネサンスの盛期後の詩の置かれた情況と可能性を探る格好の対象であるように思われる。

001　Bien que は，グーゲネムによれば，16世紀半ば頃から広まり始めた譲歩

を示す従属節。詩頭に置くのは新趣向か。

005　ガドッフル（Gilbert GADOFFRE）の『ロンサール－彼自身による－』（*RONSARD par lui-même*, coll.《Écrivains de toujours》, Seuil, Paris, 1960年）の中の詩選集ではこの行は新たに起こされており，以下四行詩の体裁をとっている。彼はプレイヤッド叢書の『ロンサール全集』に依拠しているが，同全集を見ると（pp. 293－297）改行は一切なされていない。ガドッフルは読み易さを意図したのかも知れないが，このことだけでもかなり印象が異なってくる。ちなみにローモニエ版の初出形を見ると8行，10行，14行，8行，12行，10行，8行，4行に前半はまとめられ，075以下の転調の後は，14行，12行，9行，11行，8行，8行，10行，10行，6行，8行，4行となっている。

007　78年以降では《portrait》（肖像画）が《semblant》（面影［ユゲ］）に置き替えられている。《lieu》は「家柄」の意か。

008　同様に78年以降では《Comme un portrait fait honneur à son Dieu》と《image》が《portrait》に変わると共に，比較がより明確になっている。《Comme un image au temple d'un grand Dieu》では，《au temple～》が省略された〈fait honneur〉の間接補語なのか，それとも《image》〈聖画〉の補語なのか判然としないきらいがある。

以下拙訳を試みてみよう。

あなたの美しい顔かたちが，
わたしの心に描き込まれたまま時経るとも消えず，
そして活きた絵としていつも
刻み込みつつ携えておりますが，

やはりあなたの肖像はあなたの家系の誉れ,
たぐいまれなもの
(私の研鑽と書の飾りにさせて戴いております)
ちょうど偉大なる神の神殿を飾る聖画のように。

賛辞としては月並みのようだが，スコットランドに滞在したことのあるロンサールは彼地の，物理的にも心理的にも，いかに遠いかを知っていた訳で，その点を考慮に入れる必要があるだろう。フランスとスコットランドの間には宗教的には敵対するイングランドが立ちはだかっていることもこの距離感を増幅していることだろう。「出立のエレジー」の直裁な叙情と比較して見るべきか。

009　Vous n'estes pas en drap d'or habillée,
010　Ny les joyaux de l'Inde despouillée,
011　Riches d'email & d'ouvrages, ne font
012　Luire un beau jour autour de vostre front:
013　Et vostre main, sans artifice belle,
014　N'a rien sinon sa blancheur naturelle:
015　Et voz beau doids, cinq arbres inegaux,
016　Ne sont ornez de bagues ny d'anneaux:
017　Et la beauté de vostre gorge vive
018　N'a pour carquan que sa couleur naïve.

009　78年以降では,《Vous n'estes vive en drap d'or habillée》となっている。「黄金の衣を着ていない」から「着ていても生きてはいない」では重大な変更に思われる。《vive》は「活き活きした」ではなく「生きた」[ユゲ] に解釈すべきようである。なぜなら，009－018における《vous》はロンサールの心に刻まれたマリー・スチュアートの肖像であろうから。

010 《Ny はグーゲネムによると，文頭にある場合はラテン語の《neque》の真似で「そして〜でない」という単独の否定を示すこともあるが，この場合はどうであろうか。ともかく困難なのは《despouillée》をどう処理するかである。「インド」に掛かるのか《vous》にかかるのか判断に迷う。前者であれば「略奪された」であろうし，後者であれば「取り去った」であろう。しかし動詞《font》の主語は明らかに《les joyaux》であるから「あなたはインドの冠を外し，それがあなたの額を輝かせることはない」と解釈するには無理があるように思われる。筆者としては《Ny》はラテン語法，《despouillée》は「インド」に掛かると一応解釈しておく。もちろん詩的許容を考慮すれば「あなたの脱がれたインドの宝冠は……」もあながち無理な解釈ではなく，むしろ自然かも知れない（すなわち，[dont vous avez été] despouillé の省略語法)。

013　78 年以降では，《Et vostre main des plus belles la belle》とこれもかなり重大な変更が加えられている。初出形の方が 009 − 018 のテーマにより相応しいと感じるのは筆者のみだろうか。

014 − 016　やはり 78 年以降では大幅な変更が加えられている。まず《Vos beaux doids, cinq arbres inegaux》が《Vos longs doigts, cinq rameaux inegaux》に変わっている。初出形の方が，心の肖像はやはりイメージでしかなく死に等しいというテーマに即していると感じられる。《Ne sont pompeux de bagues》についても同様である。

以下同様に拙訳を試みる。

あなたは金の衣に身を包むこともなく
また略奪を欲しいままにされたインドよりもたらされた，
（またあなたが脱がれたインドよりもたらされた）

釉も鮮やかな細工も入念なあの宝冠も
あなたの額に輝きをそえることはありません，
美しい飾りも捨てたあなたの手は
その生な白さより他なにもないのです。
そしてその美しい指も，五本の不揃いの木，
指輪やリングに飾られてはいません。
あなたの息づく美しい喉を飾るのは
ただ首枷のような自然な色付きのみ。

かなり異様な趣であり，マルセル・レイモンがマニエリスムの範疇に加えたのも頷ける。俗世の女王としてではなく，しばらく会えないうちに，マリー・スチュアートは，おそらく聖画に描かれる聖女のように，穏やかで透明な雰囲気を漂わせる肖像としてロンサールの心の内で昇華されたのであろう。

以下は最初にお断りした理由により次の機会に回させていただく。恐らく今回扱った部分についても追加変更する部分が生じるかもしれない。

（以下次回）